

\mathbb{R}^n の線形部分空間に関する補足

● 命題 5.46 の証明

ここでは、命題 5.46 (p.141) の証明を与える。

Step 1:

任意の W に対して $\dim W \geq 0$ であることは自明であり、 $\dim W \leq n$ であることは系 5.20 (p.131) から従う。

Step 2-1:

$\{0\}$ から取り出せるのは 0 のみであり、 0 単独では 1 次従属である。つまり $\{0\}$ から 1 次独立なベクトルの組は取り出すことができない。従って、 $\{0\}$ から取り出せる 1 次独立なベクトルの最大数は 0 ゆえ $\dim\{0\} = 0$ である。

Step 2-2:

我々は、 \mathbb{R}^n には n 個の 1 次独立なベクトルが存在することを知っている。(基本ベクトルを考えればよい。) そして、 $(n+1)$ 個以上のベクトルは必ず 1 次従属となることも知っている。(系 5.20.) ゆえに $\dim \mathbb{R}^n = n$ である。

Step 3-1:

$W \neq \{0\}$ と仮定する。最初に W に属するベクトル $\mathbf{a}_1 \neq 0$ を任意にとる。 \mathbf{a}_1 単独で 1 次独立な 1 つのベクトルからなる組と考えられるから、少なくとも $\dim W \geq 1$ ゆえ $\dim W \neq 0$ である。言い換えれば、 $\dim W = 0$ ならば $W = \{0\}$ でなければならない。

Step 3-2:

最後に、 $\dim W = n$ の場合を考える。すなわち、 W から n 個の 1 次独立なベクトル $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n$ を取り出せるとする。 W は線形部分空間なのだから $\text{Span}\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n\} \subset W$ である。一方、それらは \mathbb{R}^n の基底となるのだから $\mathbb{R}^n \subset \text{Span}\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n\}$ である。(p.135, 定理 5.31.) 従って $\mathbb{R}^n \subset W$ である。ゆえに $W = \mathbb{R}^n$ である。□

● 定理 5.56 の証明

ここでは、定理 5.56 (p.145) の証明を与える。そのために補題を用意しておく。

補題 1. A を $m \times n$ 行列とすると、集合 $V = \{Ax \mid x \in \mathbb{R}^n\}$ は \mathbb{R}^m の線形部分空間であり $\dim V = \text{rank } A$ である。

(証明).

(Step1; 線形部分空間であること):

$u, v \in V$ とすると、ある $a, b \in \mathbb{R}^n$ が存在して $u = Aa, v = Ab$ と書ける。そして、

$$u + v = Aa + Ab = A(a + b) \in V, \quad ku = kAa = A(ka) \in V$$

となるから、 V は \mathbb{R}^m の線形部分空間である。

(Step2; V の次元):

V に属する任意のベクトル v に対し、ある $b \in \mathbb{R}^n$ が存在して $v = Ab$ と書けるわけだが、このときの b を標準基底により $b = b_1e_1 + b_2e_2 + \dots + b_ne_n$ と表したならば、

$$v = A(b_1e_1 + b_2e_2 + \dots + b_ne_n) = b_1Ae_1 + b_2Ae_2 + \dots + b_nAe_n \quad (1.1)$$

である。以上は $V \subset \text{Span}\{Ae_1, Ae_2, \dots, Ae_n\}$ を意味する。(1.1) の右辺から左辺への式変形を考えれば $V \supset \text{Span}\{Ae_1, Ae_2, \dots, Ae_n\}$ もわかる。結局

$$V = \text{Span}\{Ae_1, Ae_2, \dots, Ae_n\} \quad (1.2)$$

である。

一方、行列 A を列ベクトルによる分割表示で $A = (a_1 \ a_2 \ \dots \ a_n)$ と表したならば、

$$(a_1 \ a_2 \ \dots \ a_n) = A = AI_n = A(e_1 \ e_2 \ \dots \ e_n) = (Ae_1 \ Ae_2 \ \dots \ Ae_n)$$

ゆえ、各列 a_j は Ae_j に等しい。従って、(1.2) と合わせて

$$V = \text{Span}\{a_1, a_2, \dots, a_n\}$$

を得る。定理 5.55 (p.144) より、 $\dim V = \text{rank}(a_1 \ a_2 \ \dots \ a_n) = \text{rank } A$ である。□

(定理 5.56 の証明) .

$\text{rank } A = r$ とおいて、 $W = \{x \mid Ax = 0\}$ に対し $\dim W = n - r$ を示そう。

Step 1:

$V = \{Ax \mid x \in \mathbb{R}^n\}$ とする。補題 1 より、 V は \mathbb{R}^m の r 次元線形部分空間である。そこで、 V の基底 v_1, \dots, v_r を選んでおく。ここで選んだ v_j ($j = 1, \dots, r$) は V の元なのだから、 $Av_j = v_j$ を満たす $b_j \in \mathbb{R}^n$ が各 j で存在する。そのような b_j ($j = 1, \dots, r$) も選んでおく。

Step 2:

$x \in \mathbb{R}^n$ を任意のベクトルとする。 $Ax \in V$ を、Step 1 で選んだ基底の 1 次結合として書いたものを $Ax = \sum k_j v_j$ とすると、

$$Ax = \sum_{j=1}^r k_j v_j = \sum_{j=1}^r k_j A b_j = A \left(\sum_{j=1}^r k_j b_j \right)$$

となる. 右辺において, A との積に現れたベクトルを $\mathbf{x}' = \sum k_j \mathbf{b}_j$ と書こう. すると $A\mathbf{x} = A\mathbf{x}'$ であるから, $A(\mathbf{x} - \mathbf{x}') = \mathbf{0}$ である. すなわち $\mathbf{x} - \mathbf{x}' \in W$ である. 解空間 W の次元を s で表すものとし, W の基底 $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_s$ も選んでおき, $\mathbf{x} - \mathbf{x}'$ をそれらの1次結合で $\mathbf{x} - \mathbf{x}' = \sum l_i \mathbf{a}_i$ のように表しておく. このとき

$$\mathbf{x} = \sum_{i=1}^s l_i \mathbf{a}_i + \mathbf{x}' = \sum_{i=1}^s l_i \mathbf{a}_i + \sum_{j=1}^r k_j \mathbf{b}_j$$

となって, $\mathbf{x} \in \text{Span}\{\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_s, \mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_r\}$ が従う. 今, \mathbf{x} は任意なのだから

$$\mathbb{R}^n \subset \text{Span}\{\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_s, \mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_r\}$$

である. 逆向きの包含関係は自明なことであるから, 結局

$$\mathbb{R}^n = \text{Span}\{\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_s, \mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_r\}$$

を得る.

Step 3:

$(s+r)$ 個のベクトル $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_s, \mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_r \in \mathbb{R}^n$ は1次独立である. なぜなら, 1次関係

$$c_1 \mathbf{a}_1 + \dots + c_s \mathbf{a}_s + c_{s+1} \mathbf{b}_1 + \dots + c_{s+r} \mathbf{b}_r = \mathbf{0}$$

を考えると, この両辺に A を掛けて

$$\mathbf{0} + c_{s+1} \mathbf{v}_1 + \dots + c_{s+r} \mathbf{v}_r = \mathbf{0}$$

を得るが, $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_r$ の1次独立性から $c_{s+1} = \dots = c_{s+r} = 0$ でなければならない. 従って, 今考えている1次関係は $c_1 \mathbf{a}_1 + \dots + c_s \mathbf{a}_s = \mathbf{0}$ に帰着する. 今度は, $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_s$ の1次独立性から $c_1 = \dots = c_s = 0$ でなければならない.

Step 4:

Step 2 と Step 3 より, $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_s, \mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_r$ は \mathbb{R}^n の基底をなすといえる. 従って, $n = \dim \mathbb{R}^n = s+r$ を得る. ゆえに $\dim W = s = n - r = n - \text{rank } A$ である. \square